

## 名前も知らない、あなたへ

福岡県 大野城市立大野中学校 3年

大塚 奏 (おおつか かなで)

今こうして、名前も知らないあなたへ手紙を書いています。あて先も分からない便りですが、いつかあなたの目に留まることを願いながら、書き進めます。

昨年十二月五日の夜、自宅の電話が鳴りました。私たち家族が暮らす福岡県の隣、佐賀県の警察署からでした。

「捕まえました」。その前の年の五月、私たちの家に侵入し、お金を盗んだあなたを逮捕したという知らせでした。

家族でプロ野球観戦に出かけた、あの夜。マンションの外壁工事の足場を伝い、五階の留守宅に侵入したあなたは、母が台所の引き出しに収めていた一万円札七枚と、小銭をまとめていた小さな袋を持ち去りました。

表情を失った母、厳しい口調で通報する父、慌ただしく動き回る警察の方々。日付が変わり、ようやく少し落ち着いた頃、父と母が同時にまったく同じことを口にしました。

「金で済んで良かったな」「本当、お金だけで良かった」。この言葉の意味が、理解できますか。中学一年の私と小学四年の弟。もしも、子どもたちだけで留守番をしている時に泥棒が入っていたら、驚いて叫び声を上げていたら、どうなっていたことか。両親は最悪の場面を想像したのです。

翌日、家中の窓に二重、三重の補助鍵を取り付けました。外出前も帰宅後も、母は何度も何度も鍵を点検するようになりました。子どもだけの留守番もできなくなりました。

よく聞いてください。あなたが盗んだのはお金だけではないのです。何より大切な子どもの安全を脅かされ、金額では表せない恐怖を植え付けたのです。私と弟を守ることを考えてくれる両親の姿に、私は、あなたを絶対に許さないと、一時は心に刻みました。

一年七か月後のまさかの逮捕に、私と弟は興奮して、あなたの名前や年齢、住所などを次々と父に尋ねました。でもなぜか、答えてくれません。納得できない私たちに、父は古い新聞記事を見せながら、十数年前の自分の過ちを打ち明けてくれました。

当時、私たちが住んでいた町で、高齢の夫婦が三十代半ばの息子を殺すという事件がありました。職を失い、トラブルを起こしてばかりの息子のために、夫婦はいつも謝っていました。そんな日が六年も続きました。

ある夜、息子が近所の保育園を名指しして「園児を殺す」と予告しました。それを食い止めるため、父親は決断しました。翌朝、眠っている息子の頭を木のバットが折れるまで殴り、スカーフで首を絞めました。動かなくなるまで足を押さえていたのは、母親でした。

裁判では、執行猶予の判決が言い渡されました。裁判長は「同じ苦しみを持つ家庭の力になってほしい」と諭したそうです。

しばらく後、父がよちよち歩きの弟と散歩をしていると、向こうからその夫婦が寄り添うように歩いてきました。一瞬、目が合いました。父は仕事の関係で二人の顔を知っていましたが、気付かないふりをしました。すると、夫婦は腰を深く、深く折って、繰り返し頭を下げながら通り過ぎていったのです。顔を伏せ、もう二度と目を合わせようとせず。

「あの時、お父さんは『事情を知っている者の目』をしてしまったんだろう。それがご夫婦に伝わった。今でも申しわけない」と父は言いました。

私は、父が何も答えなかった理由に気づきました。社会に戻ってきたあなたと私たちが万が一顔を合わせた時、「あの時の犯人だ」という表情をすることがないように。そのことで、懸命に立ち直ろうとするあなたの心を傷つけたり、逆上したあなたが私たちに危害を加えたりすることがないように、と。

今回の事件をきっかけに、償いについて考えました。償いとは、加害者が反省から更生へと踏み出すことについて、被害者が許し、認めること。そして、加害者が二度と同じ過ちを繰り返さないこと。この二つがそろって初めて、償いになる。これが、今の私なりの結論です。

私たち家族は、あなたを許しています。償いの半分は終わりです。しかし、本当に苦しく、難しいのはこれからです。再犯率という恐ろしく大きな数字がそれを証明しています。

あなたは今、どこで、何をしていますか。働くことで七万円を得ることの大変さ、働いて得た七万円の重みを感じていますか。「あいつは泥棒だったんだ」という卑怯なささやきが、耳に入ってくることはありませんか。それは、立ち直ろうとするあなたの心をくじくでしょう。でも、耐えてください。それを言い訳にして、逃げないでください。

私はあなたの名前も、顔も知りません。それでも、あなたを見えています。償いを成し遂げる日を待っています。逃げない、負けないあなたであるよう、応援しています。